CA1659

研究文献レビュー

今日の医学図書館

1. はじめに

本稿の目的は、医学図書館に関する国内の研究文献をレビューして、現状や動向を掴むことにある。限られた誌面では詳細まで言及できないが、解説文献なども含め幅広く取り上げるように心がけた。対象文献は、NPO 法人日本医学図書館協会（以下 JMLA）の機関誌『医学図書館』をはじめとする図書館系の雑誌や医学系の雑誌に掲載された、比較的医学図書館に特有と思われる、2003 年以降の国内文献とした。

はじめに、医学図書館の範囲を記しておく。医学図書館には、設立母体も目的もサービス対象者も規模も異なる、さまざまな図書館や図書室（以下、固有名詞等以外は図書館に統一）がある。「図書館情報学ハンドブック 第2版」と「図書館情報学用語辞典 第3版」によると、「医学図書館」は「患者用図書館」とともに、「病院図書館」の1つとして定義されている。しかし「医学図書館」は病院内への図書館サービスに限定されるものではなく、医学教育、医学研究、現職者への研修などにも密接なかかわりをもつ組織である。したがって本稿では、教育・診療・研修の場である医学部・歯学部・薬学部・医療看護学部・医療技術学部などの大学図書館、看護・医療技術系などの短期大学図書館や専門学校図書館、診療や研修の場である病院図書館、研究所の図書館、さらに病院内の患者図書サービスや患者図書館を含めて「医学図書館」として取り上げる。本稿で述べる「医学図書館」は、医・歯・薬・看護学をはじめとする生命科学全般を扱うため、関連する学問領域は幅広いものとなる。なお、看護図書館は本号掲載の別稿を参照されたい。

テーマの選定には、JMLA 総会分科会⁽¹⁾を参考にした。分科会では医学図書館に関するトピックスが取り上げられており、近年のテーマを概観すると「学術情報をめぐる話題」、「患者・市民への健康情報の提供」、「医学図書館（員）の役割と専門性」が浮かび上がる。本稿では「学術情報をめぐる話題」を医学とその他に分け、4つのテーマについてレビューする。医学図書館固有の事項を述べたうえで、図書館界一般での動向についても言及していく。

2. 医学情報をめぐる話題

本章では、医学図書館で扱う特色のある情報や取り

組みを取り上げる。

2.1. 医学情報の二重

医学をはじめとする学術情報量は、爆発的に増加している。多忙な医療従事者が診療や研究に必要な情報を得るためには、効率的な情報検索技術の習得が必要となる。日常の情報収集行動や診療現場で起きる疑問への対処など、医療従事者の情報ニーズを把握する取り組みとして、臨床医⁽²⁾⁽³⁾、大学附属病院長⁽⁴⁾、保健師⁽⁵⁾、薬剤師⁽⁶⁾⁽⁷⁾、看護師⁽⁸⁾など、各利用対象者についての調査が行われている。また医療従事者と医療系図書館員の、情報サービスの意識の差について考察されている⁽⁹⁾。

2.2. 情報検索

野添は米国国立医学図書館（NLM）が1960年代から作成している医学文献データベース MEDLINE などの、医学情報検索の流れを歴史的に概観している⁽¹⁰⁾。阿部は1990年代以降の MEDLINE 検索方法の海外文献をレビューして、検索方法の開発等を整理している⁽¹¹⁾。図書館における医療系データベースの導入状況調査では、エンドユーザー検索が主流の現在、情報環境の整備は図書館の重要な役割であると述べられている⁽¹²⁾。また医学データベースの検索結果の比較からは、図書館員が多くの情報源に通じていることが望まれている⁽¹³⁾。他にも図書館員と教員が連携した検索指導例⁽¹⁴⁾の紹介や、医学情報教育が学生の知識や関心に及ぼす影響が調査されている⁽¹⁵⁾。

2.3. 医学教育支援、チュートリアル

医学部のカリキュラムは、従来の講義中心の知識詰め込み型から、少人数で問題を発見して課題解決能力を養うプログラムへと移行している。医師養成機関としての役割を持つ大学医学図書館では、教育プログラムと連携した、そのための判断材料となる情報提供が求められる。近年のチュートリアル教育については吉岡ら⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾⁽¹⁹⁾⁽²⁰⁾⁽²¹⁾の解説に詳しく、医学図書館誌の特集⁽²²⁾では1990年に東京女子医科大学が導入した先進的な取り組みなどが紹介されている。

医学生以外の利用対象者では、2004年に開始された新臨床研修制度による臨床研修医に対する、病院図書館の果たすべき役割⁽²³⁾が提言されている。また特定の専門分野における高レベルの経験や知識を認定する、専門医制度について解説⁽²⁴⁾されている。このような医学界の動きに対応していくとともに、図書館員

自身の専門性を高める必要性が説かれている。

2.4. 情報リテラシー教育

医学部のカリキュラムとして行われている、図書館員による情報リテラシー教育の実態調査⁽²⁵⁾結果では、62%の医学部で開催されていた。一方、定刻に決められた会場に足を運びづらい医療従事者向けに、研究室などに出向いた出張説明会の開催事例が報告⁽²⁶⁾されている。医学論文の執筆にあたって必要とされる情報リテラシーの特徴は、一般的な知識に加えて、倫理規定・法律・臨床研究登録制度などが必要であると述べられている⁽²⁷⁾。

2.5. 病院機能評価

近年の医療サービスでは、医療組織が連携した、患者のニーズに応えた質の高い医療の実践が求められる。その実現のために、日本医療機能評価機構という第三者機関が所定の評価項目により、病院組織の活動が適切であるかを評価・認定する病院機能評価制度⁽²⁸⁾⁽²⁹⁾⁽³⁰⁾⁽³¹⁾がある。医療機関のすべての組織が評価対象であり、図書館も含まれている。地域医療支援病院では、医療法第22条に図書室の設置が規定されている。図書館機能の評価には「図書室機能の確立」と「図書室が適切に運営されている」の2項目が設けられ、施設・設備・人員・資料・利用環境の整備が求められている。受審過程は他部署職員とのコミュニケーションなどを通して、組織における図書館の位置づけを見直す機会となる。また受審結果により、問題点に対する改善の方向性が提言され、業務見直しの機会となっている。

2.6. EBM

EBM (Evidence-based Medicine) は、科学的根拠に基づく医療と訳される。臨床医の経験だけに偏らず、科学的な根拠と患者の価値観をも合わせた医療の実践を指している。河合⁽³²⁾は国内の歴史について、1997年に「EBM リサーチライブラリアンワークショップ」が開催され、一時の隆盛を経て定着に向かう流れをまとめている。EBM支援のための情報専門職「Informationist」⁽³³⁾や、大学医学図書館員⁽³⁴⁾が果たすべき役割と活動が紹介されている。効率的な情報利用のためのEBMデータベースの構築と提供⁽³⁵⁾や、EBM支援のための人材育成⁽³⁶⁾について調査が行われている。一方でEBMの情報源が緊急医療情報に対応しきれていないこと⁽³⁷⁾や、二次情報源を比較した結果から情報源の特性を理解している必要性⁽³⁸⁾が

述べられている。EBMの文献分析には、EBMを謳った国内の臨床医学図書⁽³⁹⁾や、国内雑誌の特集記事⁽⁴⁰⁾を対象にした調査が行われている。

2.7. 診療ガイドライン

診療ガイドラインとは、「特定の臨床状況のもとで、適切な判断や決断を下せるよう支援する目的で体系的に作成された文書」⁽⁴¹⁾であり、医療現場において診療の根拠や手順などを示す指針である。日本医療機能評価機構の医療情報サービス“Minds (Medical Information Network Distribution Service)”⁽⁴²⁾⁽⁴³⁾は、ウェブで診療ガイドラインを提供している。EBMによる最良の根拠(エビデンス)に基づいた診療ガイドラインの作成には、医学図書館員が関わっている事例がある。エビデンス作成のための文献検索では、白内障⁽⁴⁴⁾や禁煙治療⁽⁴⁵⁾を対象とした報告がある。また白内障を対象とした引用文献の評価⁽⁴⁶⁾が行われている。診療ガイドラインの利用調査からは、関心の高まりが報告される一方で、Mindsなどの情報環境の整備、作成の標準化と評価、専門医・一般医・市民向けのよう利用者別の作成などが提言されている⁽⁴⁷⁾。

2.8. 医学図書館の運営と将来像

医学図書館については、少々古いJMLAがガイドライン⁽⁴⁸⁾⁽⁴⁹⁾やアンケート結果⁽⁵⁰⁾を発表している。青木⁽⁵¹⁾は1980年代のマセソン・レポートからの医学図書館のあり方の流れをレビューして、情報の電子化を中心に述べている。中山⁽⁵²⁾は国内外300館以上の図書館見学経験から、米国や北欧を参考にした医学図書館のあるべき姿を提言している。

病院図書館については、病院図書研究会の統計調査を基に、多くが1~2名という少人数の職員で運営される病院図書館の実態が明らかにされている⁽⁵³⁾。薬学図書館については、薬学部教育6年制などの変革や医薬品情報提供などに対応した図書館づくりが述べられている⁽⁵⁴⁾。

3. 患者・市民への健康(医学・医療)情報の提供

本章では、患者や市民に健康情報を提供する試みを紹介する。

3.1. 健康情報の提供

患者自身や患者の家族が治療方法を選択するための、インフォームド・コンセント(説明と同意)やセカンド・オピニオン(主治医以外の意見を聞くこと)の普及に

より、医療・健康情報のニーズや患者の知る権利への意識が高まっている。従来の医学図書館は限られた医療従事者を利用対象としてきたが、情報提供の対象を患者や一般市民へも広げる試みが行われている。その方式はさまざま、院内に患者図書館を常設、職員専用図書館を公開、職員図書館の一角に患者図書コーナーを設置、日時を決めて院内を巡回、医学図書館に患者図書館を併設、公共図書館と連携、ウェブで情報を発信、などがある。

奈良岡⁽⁵⁵⁾は国内の歴史や関連する動きや実践例などを幅広くレビューしている。近年はJMLA総会分科会や各種研究会、雑誌の特集⁽⁵⁶⁾⁽⁵⁷⁾⁽⁵⁸⁾⁽⁵⁹⁾⁽⁶⁰⁾でも取り上げられる関心の高いテーマであり、多くの実践例や調査が報告されている。必要性を説く文献には、患者への情報提供⁽⁶¹⁾、図書館でのサービス展開⁽⁶²⁾⁽⁶³⁾、公共図書館における情報提供⁽⁶⁴⁾⁽⁶⁵⁾⁽⁶⁶⁾がある。また地域や館種を超えた図書館の連携⁽⁶⁷⁾や、医学図書館と地域の公共図書館との連携⁽⁶⁸⁾が紹介されている。海外の先進事例は、欧米⁽⁶⁹⁾、英国⁽⁷⁰⁾、米国⁽⁷¹⁾⁽⁷²⁾⁽⁷³⁾⁽⁷⁴⁾について紹介されている。実態調査には、患者医療図書サービスの現状⁽⁷⁵⁾、国内で最初に病院図書館を一般公開した京都南病院図書室の利用⁽⁷⁶⁾⁽⁷⁷⁾、患者や家族への医療情報提供⁽⁷⁸⁾、患者図書館の来館者⁽⁷⁹⁾、医学図書館における一般市民の利用⁽⁸⁰⁾、公共図書館での情報提供⁽⁸¹⁾がある。

各館の実践例とともに、団体等による活動も活発に行われている。日本図書館協会健康情報委員会⁽⁸²⁾⁽⁸³⁾⁽⁸⁴⁾⁽⁸⁵⁾は、主に公共図書館におけるサービスを扱っている。厚生労働省科学研究費「患者／家族のための良質な保健医療情報の評価・統合・提供方法に関する調査研究班」⁽⁸⁶⁾⁽⁸⁷⁾⁽⁸⁸⁾は、館種をこえた市民への健康情報提供を目的として各種の調査を行った。JMLAはサービス定着を模索して解説書を刊行し⁽⁸⁹⁾、関連団体と共同でサイト集「からだところの情報センター」⁽⁹⁰⁾をまとめた。同様に国立国会図書館はホームページの「テーマ別調べ案内」⁽⁹¹⁾において、「病気（疾病）別医療情報ガイド」と「医療・医学」を提供している。全国患者図書サービス連絡会⁽⁹²⁾⁽⁹³⁾は実践マニュアルをまとめ、定期的に研究会を開催するなどの継続した活動を行っている。日本病院ライブラリー協会は、患者図書サービスのガイドブックを作成して⁽⁹⁴⁾⁽⁹⁵⁾、ホームページで患者医療図書サービス支援事業を展開している⁽⁹⁶⁾。いいなステーション⁽⁹⁷⁾は患者会や医療情報が入手できる施設の情報をまとめるなど、患者の立場に立った活動を行っている。健康情報棚プロジェク

ト⁽⁹⁸⁾⁽⁹⁹⁾⁽¹⁰⁰⁾⁽¹⁰¹⁾は闘病記や患者会資料への円滑なアクセス実現をめざしている。日本病院患者図書館協会⁽¹⁰²⁾は患者図書サービスの普及をはかっている。

電子的な情報の実態では、インターネット上に掲載された医療情報の信頼性⁽¹⁰³⁾や、日本医学会分科会ホームページで市民向けに提供している医学情報⁽¹⁰⁴⁾が調査されている。患者の立場に立った調査には、情報の開示や医療の透明性の担保⁽¹⁰⁵⁾、入院患者の携帯電話やインターネットなどの情報アクセス環境⁽¹⁰⁶⁾がある。また利用対象者の拡大に伴って問題となる個人情報保護について、開原は病院図書館の事例を述べている⁽¹⁰⁷⁾。新保は医薬系図書館に関連する法律を整理・解説して、「プライバシー保護」と「個人情報保護」を混同しないように扱うことを説いている⁽¹⁰⁸⁾。

4. 学術情報の変化をめぐる話題

本章では、2章のように医学特有の情報ではないが、医学図書館や医学分野に関した、学術情報の流通や試みを取り上げる。

4.1. 学術情報流通のデジタル化

情報のデジタル化により、図書館サービスが受ける影響⁽¹⁰⁹⁾や、電子ジャーナルが与える社会や図書館の変化と影響を述べ効果的な提供方法⁽¹¹⁰⁾⁽¹¹¹⁾⁽¹¹²⁾⁽¹¹³⁾が検討されている。電子ジャーナル導入例⁽¹¹⁴⁾⁽¹¹⁵⁾では、小規模な病院図書館の導入事例が紹介されている。また電子ジャーナルに関するアンケート結果⁽¹¹⁶⁾から、学術情報を提供する出版社のスタンスが垣間見られる。

医学図書館のウェブサイトでは、利用者が電子ジャーナルに到達するまでの経路調査⁽¹¹⁷⁾や、ウェブサイトに掲載した印刷版雑誌の製本情報から電子ジャーナルへリンクする情報媒体の過渡期の取り組み⁽¹¹⁸⁾が紹介されている。医学図書館のウェブサイト評価では、デザインやレイアウト等の使い勝手というユーザビリティからの評価と提言⁽¹¹⁹⁾と、アクセスログを解析した評価法⁽¹²⁰⁾が試みられている。また図書館の主題情報をコンパクトにまとめた、パスファインダーが持つ可能性が検討されている⁽¹²¹⁾⁽¹²²⁾。

電子ジャーナルの利用情報について、小野寺⁽¹²³⁾は海外の閲読データに関する研究文献をレビューしている。引用索引データベース“Journal Citation Reports”でオープンアクセス誌の収録が増えている⁽¹²⁴⁾一方、オープンアクセス化によって被引用が半自動的に増加するとは言いきれなく⁽¹²⁵⁾、引用に影響を与えるためには雑誌の質向上が必要⁽¹²⁶⁾と述べられている。また

著作権第 31 条の制限規定を適用されない病院図書館の現状と、著作権法改正要望書提出の流れがまとめられている⁽¹²⁷⁾。

学術情報のデジタル化による効果のひとつに、遠隔地への時差のない情報提供が可能となる点が挙げられる。国連等の諸機関が開発途上国を対象とした学術情報支援プログラムに取り組んでおり⁽¹²⁸⁾、2002 年には国際保健機関 (WHO) による、医学系の商業電子ジャーナルへのアクセス権を提供する“HINARI (Health InterNetwork Access to Research Initiative)”⁽¹²⁹⁾が開始された。学術情報を提供するだけでなく、情報を使いこなす能力の習得にも重点を置いている点が特徴である。医学図書館員が利用者教育やシステム構築に携わり、現地やウェブで情報リテラシー教育が行われている⁽¹³⁰⁾。利用登録機関数は増加しており、開発途上国から発表される文献数は増加している⁽¹³¹⁾。また地域に特有の学術・保健情報の発信や提供を目的とした、地域版の医学文献データベース“Regional Index Medicus”がある⁽¹³²⁾。国内での情報支援例には、札幌医科大学による地域医療機関への情報支援や、病院誌や年報などの作成にあたっての電子化支援が報告されている⁽¹³³⁾。

4.2. エビデンスにもとづく学術情報サービス

医学図書館の蔵書構成は、利用者の要求に応えられるように、幅広くバランスよく基本資料を整備することと、最新情報の整備が求められる⁽¹³⁴⁾⁽¹³⁵⁾。米国の病院図書館の基本取書ガイドである *Brandon/Hill list*⁽¹³⁶⁾ は歴史が長く定評がある。その選定評価の基準を分析して、国内雑誌の選択リスト作成が試みられている⁽¹³⁷⁾⁽¹³⁸⁾。購読雑誌の評価では、コア雑誌を選定して考慮する試み⁽¹³⁹⁾⁽¹⁴⁰⁾や、インパクト・ファクターなどの客観的な評価指標を用いた手法⁽¹⁴¹⁾⁽¹⁴²⁾⁽¹⁴³⁾⁽¹⁴⁴⁾が検討されている。また参考文献や利用調査からの雑誌評価も試みられている⁽¹⁴⁵⁾⁽¹⁴⁶⁾。

研究評価では、青木⁽¹⁴⁷⁾は計量書誌的手法による研究文献をレビューしている。計量書誌学的な分析では、電子ジャーナルの訂正やコメントの表示法についての分析⁽¹⁴⁸⁾⁽¹⁴⁹⁾や、被訂正論文の引用回数の分析⁽¹⁵⁰⁾が報告されている。文献相互利用データの分析では、医学文献における私立医科大学図書館が果たしている貢献⁽¹⁵¹⁾や、国内看護雑誌の需要の高さが報告⁽¹⁵²⁾⁽¹⁵³⁾されている。また情報源の分析として、非英語圏の構造化抄録の現状⁽¹⁵⁴⁾、生命科学系の学会予稿集などの収集・提供の現状⁽¹⁵⁵⁾、生命倫理文献の出版タイプ分

析⁽¹⁵⁶⁾が調査されている。

4.3. JMLA の取り組み

JMLA では、図書館利用者が幅広く高度な学術情報を得られる環境を整えるために、シリアルズ・クライシス⁽¹⁵⁷⁾などに対応した様々な取り組みを行ってきた。高額な欧文雑誌を加盟館で分担して購入する分担購入活動⁽¹⁵⁸⁾⁽¹⁵⁹⁾は、2007 年度は 19 館の参加で 154 誌が対象となっている。電子ジャーナル・コンソーシアム⁽¹⁶⁰⁾⁽¹⁶¹⁾は日本薬学図書館協議会 (以下 JPLA) と共同で進められている。電子ジャーナル・コンソーシアムのアンケート結果⁽¹⁶²⁾からは、契約に際してニーズ多様性への対応や、他コンソーシアムとの連携などが求められている。宇陀⁽¹⁶³⁾や細野⁽¹⁶⁴⁾は各コンソーシアムを概観したうえで、コンソーシアム間の連携を図ることや、国の情報政策として位置付けることを提起している。一方で、病院図書館における電子ジャーナルの調査結果⁽¹⁶⁵⁾⁽¹⁶⁶⁾からは、小規模な図書館では高額なコンソーシアムに参加することが困難な現状が伺える。

4.4. 国立ライフサイエンス情報センター (仮称) 設立推進

良質な学術情報が円滑に流通するためには、関連機関の相互協力や情報へのアクセス性向上が必要となる。JMLA は 2004 年に、前身の「国立医学図書館 (仮称) 検討委員会」最終報告を基に、「国立ライフサイエンス情報センター (仮称) 推進準備委員会」を発足させて検討を重ね⁽¹⁶⁷⁾、国レベルの施策として設立推進を求めて関連団体と調整を行ってきた。阿部⁽¹⁶⁸⁾は 1960 年代からの一連の活動の流れを整理して、国立ライフサイエンス情報センターが備えるべき機能や、海外の事例などを報告している。他にも求められる役割や期待⁽¹⁶⁹⁾⁽¹⁷⁰⁾⁽¹⁷¹⁾が述べられており、将来的には英国の国立電子健康図書館“NeLH (National electronic Library for Health)”⁽¹⁷²⁾のようなポータルサイトの構築も目指している。

5. 医学図書館 (員) の役割と専門性

本章では、医学図書館における専門能力開発プログラムや認定制度を取り上げる。

5.1. 専門職制度、継続教育

医学図書館員の専門性は、古くから検討されている。図書館員としての能力とともに、医学系の主題についての知識や特徴の把握が求められる。医学図書館員に求められる専門的な能力については、酒井⁽¹⁷³⁾は歴史

的な背景や専門職制から概況して幅広く紹介している。デトレフセン⁽¹⁷⁴⁾は伝統的な臨床医学図書館員を発展させた新しい役割の専門職“Informationist”について、情報学と臨床チームとして必要な知識と技能を備えるべきであり、そのための教育や国家的な認定制度の必要性を述べている。小野澤⁽¹⁷⁵⁾は米国医学図書館協会の「医学図書館員のための倫理要領」⁽¹⁷⁶⁾を参考にして、自館の倫理要領作成事例を紹介している。

山口⁽¹⁷⁷⁾は医学図書館員が専門職を目指すべき指標として歴史的に寄与してきた *Current Practice in Health Sciences Librarianship* (旧版は *Handbook of Medical Library Practice*) シリーズを、刊行に至る前史から歴史的に解説している。またシリーズ各版発行時の国内医学図書館員の時代背景を、津田ら⁽¹⁷⁸⁾が概観している。図書館員の専門性としては、サブジェクト・ライブラリアン⁽¹⁷⁹⁾⁽¹⁸⁰⁾、医科大学図書館員⁽¹⁸¹⁾、薬学図書館員の実践例⁽¹⁸²⁾、病院図書館員に求められる資質⁽¹⁸³⁾、アンケート結果に基づいた専門性の分析⁽¹⁸⁴⁾、企業における情報専門職⁽¹⁸⁵⁾がある。そして近年進められてきている業務委託について、専門図書館での現状報告⁽¹⁸⁶⁾がある。

専門職制の確立に欠かせない継続教育では、JMLAは基礎研修会と継続教育コースという教育事業を展開している⁽¹⁸⁷⁾⁽¹⁸⁸⁾ (2003年からJPLAと共催)。また研究助成制度、奨学金助成制度、JMLA協会賞・奨励賞制度が設けられている。JMLAの事業以外にも、大学図書館を中心とする継続教育⁽¹⁸⁹⁾や、団体や主題別に研究会・研修会が開催されている⁽¹⁹⁰⁾。組織によらない研究会としては医学情報サービス研究大会があり⁽¹⁹¹⁾⁽¹⁹²⁾、生物医学系の図書館員を中心に館種を超えた多くの参加者を集めている⁽¹⁹³⁾。全体的な傾向として、教育プログラムから自己研鑽の機会へと変化している。

5.2. 認定資格「ヘルスサイエンス情報専門員」

認定資格「ヘルスサイエンス情報専門員」は、生命科学系図書館に勤務して保健・医療情報に関する専門知識・技能を有する者を、JMLAが認定する制度である⁽¹⁹⁴⁾。資格取得を目指すことでさらなる資質向上を図ること、医療情報の専門的知識・技能及び管理・調整能力を持つ医学図書館員の育成を促すことを目的としている。年に2回の募集があり、2004年に第1回の認定が行われた。2007年7月の第8回までに、初級63名、中級37名、上級64名が認定されている。JMLA認定資格運営委員会は制度創設の軌跡⁽¹⁹⁵⁾や概要⁽¹⁹⁶⁾⁽¹⁹⁷⁾を紹介している。

司書の認定資格制度については、米国における教育と認証制度⁽¹⁹⁸⁾や、米国医学図書館協会の専門職能力開発プログラムと認証制度が概観⁽¹⁹⁹⁾されている。また実現こそしなかったが、病院図書館員認定資格制度の検討経験⁽²⁰⁰⁾が報告されている。医学系図書館員の認定資格制度については、背景から経緯・制度について検証⁽²⁰¹⁾されている。

6. おわりに

これまでみてきたように、最近5年間に限った文献をみるだけでも、医学図書館をとりまく環境には大きな変化が生じていることがわかる。図書館界や医学界そして学術情報をめぐる変化への対応をはじめとして、医学教育への対応、利用対象者とサービスの拡大など、医学図書館員に求められるスキルは多様で高度な内容になってきている。医学図書館員としての資質を高め、利用者のニーズに柔軟に対応できるように業務を改善することはもちろん、研究・調査や新しい試みが進んでいくことを期待している。

きやますひこ
(順天堂大学図書館：城山泰彦)

- (1) 日本医学図書館協会. “特定非営利活動法人 日本医学図書館協会総会 (過去の総会)”. http://www.soc.nii.ac.jp/jmla/sokai/index_back.html, (参照 2008-02-17).
- (2) 阿部信一ほか. 診療現場における臨床医の情報ニーズの発生と解決. 医学図書館. 2003, 50(3), 252-259p.
- (3) 裏田和夫ほか. “わが国の臨床医の情報ニーズと問題解決方法”. 日本におけるEBMのためのデータベース構築及び提供利用に関する調査研究：厚生労働科学研究補助金 医療技術評価総合研究事業 平成14年度総括・分担研究報告書. 2003, 113-121p. <http://mhlw-grants.niph.go.jp/niph/search/Download.do?nendo=2002&jigyoid=000234&bunkenNo=200201344A&pdf=200201344A0006.pdf>, <http://mhlw-grants.niph.go.jp/niph/search/Download.do?nendo=2002&jigyoid=000234&bunkenNo=200201344A&pdf=200201344A0007.pdf>, (参照 2008-02-17).
- (4) 山下ユミほか. 大学附属病院長の情報ニーズと情報習慣. 医学図書館. 2005, 52(1), 59-65p.
- (5) 平紀子ほか. 保健師の情報ニーズと医療系大学図書館の役割. 医学図書館. 2007, 54(2), 166-171p.
- (6) 平紀子. 特集, 日本薬学会127年会薬学図書館協議会企画シンポジウム：薬剤師の情報ニーズと薬学系大学図書館における役割 (1)：病院薬剤師を対象とした調査をもとに. 薬学図書館. 2007, 52(3), 211-219p.
- (7) 平紀子. 薬剤師の情報ニーズと医療系大学図書館における役割 (2)：地域別, 経験年数別, 病院規模別検討. 薬学図書館. 2007, 52(4), 340-346p.
- (8) 阿部信一ほか. 看護師の情報ニーズと情報探索行動：慈恵医大医学部看護学科平成12年度卒業生を対象にしたアンケート調査. 看護と情報. 2004, 11, 42-48p. <http://ci.nii.ac.jp/naid/110006373622/>, (参照 2008-02-17).
- (9) 平紀子. 医療従事者と医療系図書館員の情報サービスにおける意識のギャップ. 情報の科学と技術. 2007, 57(8), 404-409p. <http://ci.nii.ac.jp/naid/110006368797/>, (参照 2008-02-17).
- (10) 野添篤毅. 医学文献情報サービスから健康情報サービスへの展開：MEDLARSからMEDLINE/PubMed, そしてMEDLINEplusへ. 情報管理. 2007, 50(9), 580-593p. http://www.jstage.jst.go.jp/article/johokanri/50/9/580/_pdf-char/ja/, (参照 2008-02-17).
- (11) 阿部信一. 特集, データベース：MEDLINEの検索方法の分析研

- 究：海外文献のレビュー。医学図書館。2004, 51(3), 221-229p.
- (12) 加藤麻理ほか。国内医薬文献データベース導入状況の調査。薬学図書館。2006, 51(2), 133-138p.
- (13) 小河邦雄。PubMed と MEDLINE とその他のデータベースの比較。薬学図書館。2006, 51(4), 287-298p.
- (14) 野村美智子ほか。図書館員と教員が連携した課題解決型学習における情報検索指導。医学図書館。2003, 50(2), 141-146p.
- (15) 前田純ほか。最新医学情報に関する学生の知識、態度、関心度：医学情報教育の及ぼす影響。医療情報学。2004, 24(1), 153-161p.
- (16) 吉岡俊正。入門講座，医学教育カリキュラム：新しい潮流：第1回：Problem-based learning (PBL) チュートリアル。医学図書館。2004, 51(2), 110-112p.
- (17) 佐藤達夫。入門講座，医学教育カリキュラム：新しい潮流：第2回：モデル・コア・カリキュラム。医学図書館。2004, 51(3), 200-202p.
- (18) 阿部好文。入門講座，医学教育カリキュラム：新しい潮流：第3回：クリニカル・クラークシップ。医学図書館。2004, 51(4), 313-315p.
- (19) 福島統。入門講座，医学教育カリキュラム：新しい潮流：第4回：Computer-based Testing (CBT)。医学図書館。2005, 52(1), 11-13p.
- (20) 磯部光章。入門講座，医学教育カリキュラム：新しい潮流：第5回：Objective structured clinical examination (OSCE)。医学図書館。2005, 52(2), 125-128p.
- (21) 佐藤徹ほか。入門講座，医学教育カリキュラム：新しい潮流：第6回：スキルラボ。医学図書館。2005, 52(3), 211-213p.
- (22) 特集，チュートリアル。医学図書館。2007, 54(1), 27-62p.
- (23) 清水貴子。病院図書研究会 2004 年度第1回研修会：教育講演，新臨床研修制度と病院図書室の役割。ほすびたるらいぶらりあん。2004, 29(3), 140-147p.
- (24) 江幡歌奈子。日本における専門医制度。医学図書館。2004, 51(2), 158-162p.
- (25) 磯部恵利子。大学医学図書館員による正規授業での利用者教育の現状。医学図書館。2005, 52(3), 263-269p.
- (26) 石井保志。大学構内におけるアウトリーチ説明会の開催：医学図書館の情報リテラシー教育の可能性。医学図書館。2003, 50(2), 176-180p.
- (27) 諏訪部直子。特集：情報リテラシー・サービス，臨床医学論文執筆に必要な情報リテラシー。医学図書館。2005, 52(1), 53-58p.
- (28) 日本医療機能評価機構。病院機能評価事業。http://jicqhc.or.jp/html/survey.htm#pagetop, (参照 2008-02-17)。
- (29) 坂本泰子。特集，病院機能評価：わが国における病院機能評価。医学図書館。2006, 53(1), 21-27p.
- (30) 菅原浩幸。特集，病院の質評価の選択肢は広がるか：病院機能評価 Ver.5.0 の概要と審査の動向。病院。2005, 64(2), 108-113p.
- (31) 特集，病院機能評価。医学図書館。2006, 53(1), 20-35p.
- (32) 河合富士美。日本の EBM 揺籃期を総括する。医学図書館。2005, 52(4), 364-368p.
- (33) 野添篤毅。Evidence-based Medicine 支援のための新しい情報専門職：Informationist の役割と活動。医学図書館。2003, 50(4), 341-347p.
- (34) 酒井由紀子。くすりとエビデンス 18：エビデンスをつたえる 4：大学医学図書館員の役割。EBM ジャーナル。2002, 4(1), 96-101p.
- (35) 丹後俊郎。“日本における EBM のためのデータベース構築及び提供利用に関する調査研究”。日本における EBM のためのデータベース構築及び提供利用に関する調査研究：厚生労働科学研究補助金 医療技術評価総合研究事業 平成 14 年度総括・分担研究報告書。2003, 1-14p. http://mhlw-grants.niph.go.jp/niph/search/Download.do?nendo=2001&jigyoid=000170&bunkenNo=200100514A&pdf=200100514A0001.pdf, (参照 2008-02-17)。
- (36) 緒方裕光。EBM を支える人材の系統的な養成に関する調査研究：EBM を支える人材の系統的な養成に関する調査研究：厚生労働科学研究費補助金 医療技術評価総合研究事業 14 年度総括研究報告書。2003, 1-5p. http://mhlw-grants.niph.go.jp/niph/search/Download.do?nendo=2002&jigyoid=000234&bunkenNo=200201290A&pdf=200201290A0001.pdf, (参照 2008-02-17)。
- (37) 山田知子ほか。特集，第 21 回医学情報サービス研究大会：EBM 情報源における緊急医療情報への対応。薬学図書館。2004, 49(4), 240-245p.
- (38) 阿部信一。臨床医の EBM 実践のための二次情報源の比較分析。オンライン検索。2002, 23(2-3), 106-112p.
- (39) 諏訪部直子。「EBM」を書名に含む国内臨床医学書の分析と評価。医学図書館。2004, 51(4), 363-367p.
- (40) 宮下牧子ほか。和雑誌特集記事のエビデンス。医学図書館。2006, 53(2), 126-132p.
- (41) 平輪麻里子。解説，診療ガイドライン。病院図書館。2004, 24(2), 51-54p.
- (42) 山口直人。特集，日本病院図書研究会第 1 回研修会：特別講演：医療情報サービス『Minds』について。ほすびたるらいぶらりあん。2004, 29(3), 131-139p.
- (43) 日本医療機能評価機構。“医療情報サービス Minds”。http://minds.jcqh.or.jp/, (参照 2008-02-17)。
- (44) 阿部信一ほか。白内障診療ガイドライン作成のための文献検索。医学図書館。2004, 51(2), 125-131p.
- (45) 若杉亜矢ほか。特集，第 23 回医学情報サービス研究大会：禁煙治療ガイドライン作成のための文献検索。薬学図書館。2006, 51(4), 264-268p.
- (46) 阿部信一ほか。白内障診療ガイドラインの引用文献の分析。医療情報学。2004, 24(1), 211-214p.
- (47) 平輪麻里子。診療ガイドラインの利用調査。医学図書館。2005, 52(2), 157-160p.
- (48) 日本医学図書館協会。行動への挑戦：新しい医学図書館活動のためのガイドライン。日本医学図書館協会，1991, 72p.
- (49) 日本医学図書館協会。21 世紀の医学図書館。日本医学図書館協会，1996, 15p.
- (50) 日本医学図書館協会。21 世紀の医学図書館：創立 70 周年記念。日本医学図書館協会，1998, 178p.
- (51) 青木仕。特集，ヘルスサイエンスライブラリーの構築：これからの医学図書館。日赤図書館雑誌。2004, 12(1), 2-6p.
- (52) 中山栄美子。これからの医歯薬学系図書館：特に米国と北欧の図書館を参考にして。医学図書館。2005, 52(2), 161-167p.
- (53) 橋田圭介。特集，ほすび 100 号記念号：病院図書研究会現況調査報告の分析。ほすびたるらいぶらりあん。2003, 28(3-4), 221-232p.
- (54) 十一元晴。特集：薬学教育 6 年制時代を迎えて，薬学部図書館の今後の使命。薬学図書館。2005, 50(4), 285-290p.
- (55) 奈良岡功。特集，患者図書サービス：総説：患者への医学情報の提供。医学図書館。2004, 51(4), 317-329p.
- (56) 特集，カラダと病気の情報を探そう：みんなの図書館。2003, (317), 1-48p.
- (57) 特集，患者・家族・市民の視点に立った情報提供。みんなの図書館。2004, (329), 1-51p.
- (58) 特集，患者図書サービス。医学図書館。2004, 51(4), 316-356p.
- (59) 特集，図書館における医療・健康情報の提供。現代の図書館。2005, 43(4), 183-238p.
- (60) 特集，医療情報と図書館。LISN: Library & Information Science news。2006, 130, 1-26p.
- (61) 奈良岡功。患者への医学情報の提供。全国患者図書サービス連絡会会報。2004, 11(3), 68-75p.
- (62) 石井保志。2005・トピックスを追う：図書館における医療情報サービスの展開。図書館雑誌。2005, 99(12), 844-846p.
- (63) 大沼由紀子ほか。特集，病院図書研究会 2003 年度第 1 回研修会：グループ研究発表：病院図書室担当者として患者に対する文献情報・図書サービスへのかかわり方について（第 2 報）。ほすびたるらいぶらりあん。2003, 28(2), 123-127p.
- (64) 常世田良。総会記念講演，公共図書館における医学情報提供サービス：可能性と課題。病院図書館。2006, 26(2), 59-63p.
- (65) 柚木聖。公共図書館による健康情報提供サービスの試みについて。薬学図書館。2005, 50(1), 63-69p.
- (66) 中山康子。公共図書館の健康情報サービス。全国患者図書サービス連絡会会報。2004, 11(2), 44-47p.
- (67) 山室真知子。図書館間の連携。全国患者図書サービス連絡会会報。2006, 13(2-3), 42-47p.
- (68) 市川美智子ほか。地域公共図書館との連携による健康支援事業。医学図書館。2007, 54(3), 253-259p.
- (69) 菊池佑。特集，患者図書サービス：欧米における患者への医学情

- 報サービス. 医学図書館. 2004, 51(4), 330-333p.
- (70) 宮下牧子. 英国における患者及び医療関係者に対する医療・健康情報の提供という観点での図書館の取り組み:平成16年度日本医学図書館協会英国海外研修報告. 医学図書館. 2005, 52(2), 173-179p.
- (71) 酒井由紀子. “北米における消費者健康情報(Consumer Health Information)の歴史と現状”. 健康・医学情報を市民へ. 日本医学図書館協会, 2004, 67-130p., (JMLA叢書, 3).
- (72) 酒井由紀子. 特集, 図書館における医療・健康情報の提供:北米の公共図書館における健康情報サービス. 現代の図書館. 2005, 43(4), 224-238p.
- (73) 酒井由紀子. 米国立医学図書館と図書館情報学国家委員会による健康情報サービス支援事業. カレントアウェアネス, 2006, (287), 13-16p. <http://www.dap.ndl.go.jp/ca/modules/ca/item.php?itemid=1019>, (参照 2008-02-17).
- (74) 杉江典子. 米ニューヨーク市クイーンズ区公共図書館における消費者健康情報サービス提供. 医学図書館. 2004, 50(3), 260-267p.
- (75) 長井律子ほか. 特集, 病院図書研究会 2005 年度第 1 回研修会: [事業報告] 患者医療図書サービス支援事業, 「患者医療図書サービス」現状調査報告. ほすびたるらいぶらりあん. 2005, 30(3-4), 213-217p.
- (76) 山室真知子. 病院図書室と患者図書室の現状. 医学図書館. 2004, 51(2), 113-115p.
- (77) 山室真知子. 特集, 第 13 回医学図書館研究会・継続教育コース: 医学・医療情報を必要とする人々へのサービス: 京都南病院図書室一般公開での利用状況. 医学図書館. 2007, 54(2), 150-154p.
- (78) 有田由美子ほか. 特集, 図書館における医療・健康情報の提供: 病院における患者・家族への医学・医療情報提供の現状: 病院図書室と患者図書室. 現代の図書館. 2005, 43(4), 199-207p.
- (79) 大上康子ほか. 「からだのとしょかん」来館者の実態調査: 患者が求めている看護サービスの検討. ほすびたるらいぶらりあん. 2006, 31(4), 280-287p.
- (80) 星和夫. 特集, 病院図書研究会 2002 年度第 2 回研修会: 一般市民による医学図書館の利用状況. ほすびたるらいぶらりあん. 2003, 28(1), 9-15p.
- (81) 杉江典子. 特集, 図書館における医療・健康情報の提供: わが国の公共図書館による健康情報提供に関する実態調査. 現代の図書館. 2005, 43(4), 183-192p.
- (82) 柚木聖. 日本図書館協会健康情報研究委員会の活動. 医学図書館. 2006, 53(1), 85-87p.
- (83) 柚木聖. 日本図書館協会の健康情報研究委員会の活動について. 全国患者図書サービス連絡会会報. 2006, 13(4), 61-66p.
- (84) Kenyon, Andrea. et al. 公共図書館員のための消費者健康情報提供ガイド. 公共図書館のための医学情報サービス研究グループ訳. 日本図書館協会, 2007, 262p.
- (85) 健康情報研究委員会. “第 7 分科会: 健康情報研究委員会”. つなげよう未来へ, ひらこう現在(いま)を図書館は力: 文化が集まる, 情報が集まる, 人が集まる. 平成 19 年度第 93 回全国図書館大会東京大会組織委員会編. 東京, 2007-10-29/30. 全国図書館大会東京大会組織委員会. 2007, 95-109p. (全国図書館大会要綱, 平成 19 年度(第 93 回)).
- (86) 裏田和夫ほか. “患者中心の健康情報基盤の構築”. 患者/家族のための良質な保健医療情報の評価・統合・提供方法に関する調査研究: 厚生労働省科学研究費補助金 医療技術総合研究事業 平成 10 年度統合・分担研究報告書. 2005, 89-133p.
- (87) 山口直比古. 市民への健康情報提供サービス調査研究会議(拡大)の開催. 医学図書館. 2006, 53(3), 297-299p.
- (88) 山口直比古. 市民への健康情報提供へ向けての厚労省科研費研究班の活動. 全国患者図書サービス連絡会会報. 2006, 13(4), 58-60p.
- (89) 奈良岡功ほか. 健康・医学情報を市民へ. 特定非営利活動法人日本医学図書館協会. 2004, 137p.
- (90) 日本医学図書館協会ほか. “からだところの情報センター”. <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jmla/life/index.html>, (参照 2008-02-17).
- (91) 国立国会図書館. “テーマ別調べ方案内(科学技術)”. http://www.ndl.go.jp/jp/data/theme/theme_kagi.html, (参照 2008-02-17).
- (92) 全国患者図書サービス連絡会. 患者さんへの図書サービスハンドブック. 大活字, 2001, 317p.
- (93) 山室真知子. 特集, 患者図書サービス: 全国患者図書サービス連絡会. 医学図書館. 2004, 51(4), 349-350p.
- (94) 患者図書マニュアル編集委員会. 患者医療図書サービス: 医療情報を中心とした患者図書室. 病院図書研究会, 2004, 86p.
- (95) 吉富まち子ほか. 特集, 患者図書サービス: 病院図書研究会における患者図書サービス: 「患者医療図書サービスマニュアル」の作成経緯と今後の取組み. 医学図書館. 2004, 51(4), 345-346p.
- (96) 日本病院ライブラリー協会. “患者医療図書サービス支援事業”. <http://jhla.org/kanjya/index.php>, (参照 2008-02-17).
- (97) いいなステーション. “医療情報が入手できる施設一覧”. <http://www.e7station.com/html/library/>, (参照 2008-02-17).
- (98) 健康情報棚プロジェクト. からだと病気の情報をさがす・届ける. 読書工房, 2005, 270p.
- (99) 健康情報棚プロジェクト. “闘病記ライブラリー”. <http://toubyoki.info/>, (参照 2008-02-17).
- (100) 和田恵美子. 「闘病記文庫」は患者・医療者に何をもちたすか: 健康情報棚プロジェクトの多職種協働活動を通して. 情報管理. 2006, 49(9), 499-508p. http://www.jstage.jst.go.jp/article/johokanri/49/9/499/_pdf/-char/ja/, (参照 2008-02-17).
- (101) 北澤京子ほか. 特集, 価値観の交差点: 患者・家族への情報提供を模索する: 多職種協働による健康・医療情報の社会提言. 情報の科学と技術, 56(9), 406-411p. <http://ci.nii.ac.jp/naid/110004815078/>, (参照 2008-02-17).
- (102) 菊池佑. 特集, 患者図書サービス: 日本病院患者図書館協会. 医学図書館. 2004, 51(4), 347-348p.
- (103) 三谷博明. 特集, 病院図書研究会 2004 年度第 2 回研修会: 教育講演: インターネット上の医療情報の信頼性. ほすびたるらいぶらりあん. 2005, 30(1), 7-14p.
- (104) 牛澤典子ほか. 日本医学会分科会がホームページで提供している市民向け医学情報の検討. 医学図書館. 2007, 54(3), 273-278p.
- (105) 坂本憲枝. 特集, どう生かす診療情報: 患者がほしい医療に関する情報. 病院. 2003, 62(11), 912-916p.
- (106) 和田ちひろ. 管理責任と規制緩和: 今, 入院患者が求めていること. 病院. 2004, 63(1), 56-61p.
- (107) 開原成允. 特集, 病院図書研究会 2005 年度第 2 回研修会: 特別講演: 病院図書における個人情報保護. ほすびたるらいぶらりあん. 2006, 31(1), 2-11p.
- (108) 新保史生. 医薬系図書館と個人情報保護法. 薬学図書館. 2007, 52(1), 57-64p.
- (109) 小林晴子ほか. 特集, 電子ジャーナルをめぐる: 電子ジャーナルが図書館サービスに与える影響. 医学図書館. 2003, 50(3), 218-225p.
- (110) 児玉潤. 特集, 外国雑誌とその周辺: 電子ジャーナルの効果的サービスのために. 病院図書館. 2003, 23(3), 117-121p.
- (111) 児玉潤. 非営利団体が目指す電子ジャーナルのインパクト. 医学図書館. 2003, 50(4), 353-360p.
- (112) 児玉潤. 特集, 大学図書館 2004: 学術雑誌電子化のインパクト. 図書館雑誌. 2004, 98(8), 503-507p.
- (113) 児玉潤. 特集, 雑誌のゆくえ: 学術雑誌電子化に関する考察. 日赤図書館雑誌. 2006, 13(1), 2-7p.
- (114) 坪内政義. 特集, ハイブリッド病院図書館に向けて: 小規模図書館における電子ジャーナルの必要性和選択. 日赤図書館雑誌. 2004, 11(1), 3-6p.
- (115) 及川はるみ. 特集, 雑誌のゆくえ: 病院図書館における電子ジャーナルへの移行. 日赤図書館雑誌. 2006, 13(1), 8-12p.
- (116) 「医学図書館」編集委員会. 特集, 電子ジャーナルをめぐる: 「電子ジャーナル」出版社アンケート調査結果報告. 医学図書館. 2003, 50(3), 232-251p.
- (117) 小林晴子ほか. 電子ジャーナルへのアクセスルート: 愛知医科大学での調査. 医学図書館. 2005, 52(4), 369-374p.
- (118) 境京子. 製本係からの情報提供: 製本中雑誌の電子ジャーナルへのリンク付け. 医学図書館. 2006, 53(2), 133-138p.
- (119) 黛崇仁. 医学系図書館 Web サイトのユーザビリティ. 医学図書館. 2006, 53(2), 149-155p.
- (120) 阿部潤也. 図書館 WWW サイトを評価する: アクセスログの解析から. 医学図書館. 2003, 50(3), 268-272p.
- (121) 市川美智子. 図書館パスマイニング作成報告とその可能性. 医

- 学図書館. 2006, 53(1), 55-59p.
- (122) 小嶋智美. 特集, 第22回医学情報サービス研究大会: 医療分野における図書館パスマインダーの可能性を探る. 薬学図書館. 2006, 51(1), 53-58p.
- (123) 小野寺夏生. 電子ジャーナル閲覧データに基づく論文利用の研究: 海外文献紹介. 薬学図書館. 2007, 52(3), 288-295p.
- (124) 向田厚子. Journal Citation Reports におけるオープンアクセス出版の普及状況. 医学図書館. 2006, 53(1), 41-47p.
- (125) 宮入暢子. オープンアクセスのインパクト分析. カレントアウェアネス. 2005, (284), 7-9p. <http://www.dap.ndl.go.jp/ca/modules/ca/item.php?itemid=991>, (参照 2008-02-17).
- (126) 藤枝真宏ほか. 学術雑誌の電子化はその流通と引用に影響を与えるか?: J-STAGE 搭載誌の場合. 情報管理. 2006, 49(2), 77-85p. http://www.jstage.jst.go.jp/article/johokanri/49/2/77/_pdf/-char/ja/, (参照 2008-02-17).
- (127) 飯田育子. 特集2. 研修会講演 著作権と病院図書館: 著作権と病院図書館. 病院図書館. 2005, 24(4), 158-162p.
- (128) 竹内比呂也. 発展途上国における学術情報流通とオープンアクセス. カレントアウェアネス. 2005, (285), 7-8p. <http://www.dap.ndl.go.jp/ca/modules/ca/item.php?itemid=998>, (参照 2008-02-17).
- (129) WHO. HINARI. <http://www.who.int/hinari/en/>, (accessed 2008-02-17).
- (130) 後藤敏行. WHO の HINARI プロジェクト: 途上国への電子ジャーナル提供. 医学図書館. 2006, 53(1), 14-19p.
- (131) 城山泰彦. 開発途上国研究者の情報生産と利用. 医学図書館. 2007, 54(3), 248-252p.
- (132) 北川正路. 国際シンポジウム「信頼できる医学情報の共有ー医療専門家から消費者までー»: WHO 西太平洋地域版 Index Medicus (WPRIM) 構築の現状. 医学図書館. 2007, 54(4), 380-385p.
- (133) 今野穂. 特集, 看護情報ネットワーク: 札幌医科大学附属図書館における地域医療支援サービスの展開. 看護と情報. 2005, 12, 12-18p. <http://ci.nii.ac.jp/naid/110006373642/>, (参照 2008-02-17).
- (134) 押田いく子. 特集, ハイブリッド病院図書館に向けて, 医学図書館の蔵書構築. 日赤図書館雑誌. 2004, 11(1), 21-24p.
- (135) 押田いく子. 特集1, 蔵書構築: 大学医学図書館における選書の一例. 病院図書館. 2005, 25(1-2), 3-7p.
- (136) Hill DR et. al. Brandon/Hill selected list of print books and journals in allied health. Journal of Medical Library Association. 2003, 91(1), 18-33p. <http://www.pubmedcentral.nih.gov/picrender.fcgi?artid=141184&blobtype=pdf>, (accessed 2008-02-17).
- (137) 野坂美恵子. Brandon/Hill List の収録基準の分析: 医学図書館における学術雑誌選定のための評価基準を求めて. Library and Information Science. 2002, 48, 25-41p. <http://wwwsoc.nii.ac.jp/mslis/pdf/LIS48025.pdf>, (参照 2008-02-17).
- (138) 野坂美恵子. Brandon/Hill List の収録基準の分析: 内科学分野. ほすびたるらいぶらりあん. 2003, 28(2), 85-92p.
- (139) 田中満恵. 外国雑誌におけるコア雑誌選定の経緯. 医学図書館. 2004, 51(2), 132-136p.
- (140) 北川正路. プリント版から電子ジャーナルへ切り替える外国雑誌タイトルの選定: コア雑誌タイトルを考慮した検討. 医学図書館. 2004, 51(2), 137-140p.
- (141) 地原かおりほか. 特集, 病院図書研究会 2003 年度第 1 回研修会: グループ研究発表: 所蔵学術雑誌評価と JCR (Journal Citation Reports). ほすびたるらいぶらりあん. 2003, 28(2), 116-122p.
- (142) 城山泰彦. 雑誌購読料金の計量的分析: 掲載論文数, Impact Factor 値, 所蔵館数などの分析を通して. 医学図書館. 2005, 52(1), 66-71p.
- (143) 若杉亜矢. 特集1, 蔵書構築: 所蔵雑誌の評価. 病院図書館. 2005, 25(1-2), 11-13p.
- (144) 広瀬容子ほか. 特集, 図書館・情報活動と<評価>: 引用データを用いたジャーナルコレクション評価の手法. 情報の科学と技術. 2007, 57(8), 396-403p. <http://ci.nii.ac.jp/naid/110006368796/>, (参照 2008-02-17).
- (145) 松坂敦子. 「看護研究」誌の参考文献における雑誌評価の試み. 医学図書館. 2005, 52(4), 375-381p.
- (146) 松坂敦子. 引用からみた看護教育分野における雑誌利用調査: 教育分野と臨床分野の比較をととして. 医学図書館. 2006, 53(4), 385-389p.
- (147) 青木仕. 特集, 情報の分析・解析法: 医学情報における情報の解析: 新しい情報環境の確立を目指して. 情報の科学と技術. 2003, 53(1), 34-41p. <http://ci.nii.ac.jp/naid/10016754264/>, (参照 2008-02-17).
- (148) 岡田英孝. 電子ジャーナルにおける訂正記事の扱い. 医学図書館. 2005, 52(2), 138-144p.
- (149) 岡田英孝. 「Nature Medicine」を用いたコメント記事の分析. 医学図書館. 2006, 53(4), 390-396p.
- (150) 向田厚子. The New England Journal of Medicine における被訂正論文のインパクト. 医学図書館. 2004, 51(4), 357-362p.
- (151) 酒井由紀子ほか. 特集, 図書館協力: ILL 統計データ分析からみた医学文献流通における私大医学図書館の役割. 医学図書館. 2006, 53(3), 233-238p.
- (152) 米田奈穂ほか. ビッグ・ディール後の ILL: 千葉大学附属図書館 亥鼻分館における調査. 大学図書館研究. 2006, 76, 74-81p.
- (153) 佐藤義則. 近年の NACSIS-ILL における看護文献の需要と供給: ログ分析の結果から. 看護と情報. 2007, 14, 65-72p. <http://ci.nii.ac.jp/naid/110006373705/>, (参照 2008-02-17).
- (154) 山崎茂明ほか. 非英語圏の臨床試験文献抄録はどこまで構造化されているか. 情報管理. 2003, 45(10), 666-672p. http://www.jstage.jst.go.jp/article/johokanri/45/10/666/_pdf/-char/ja/, (参照 2008-02-17).
- (155) 時実象一. 国内の大会予稿集・抄録集・報告集資料の分析: 医学・薬学分野を中心に. 情報管理. 2006, 49(4), 174-181p. http://www.jstage.jst.go.jp/article/johokanri/49/4/174/_pdf/-char/ja/, (参照 2008-02-17).
- (156) 山崎茂明. 出版タイプからみた生命倫理文献の分析. 日本における EBM のためのデータベース構築及び提供利用に関する調査研究: 厚生労働科学研究補助金 医療技術評価総合研究事業 平成 14 年度総括・分担研究報告書. 2003, 123-138p. [http://mhlw-grants.niph.go.jp/niph/search/Download.do?nendo=200201344A&pdf=200201344A0007.pdf](http://mhlw-grants.niph.go.jp/niph/search/Download.do?nendo=2002&jigyid=000234&bunkenNo=200201344A&pdf=200201344A0007.pdf), (参照 2008-02-17).
- (157) 芳鐘冬樹. 科学研究出版の費用分析とビジネスモデル. カレントアウェアネス. 2004, (282), 13-15p. <http://www.dap.ndl.go.jp/ca/modules/ca/item.php?itemid=975>, (参照 2008-02-17).
- (158) 日本医学図書館協会. “分担購入活動”. <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jmla/ejbuntan/buntan/index.html>, (参照 2008-02-17).
- (159) 殿崎正明. 日本医学図書館協会における洋雑誌分担購入の歩み. 医学図書館. 2003, 50(2), 155-164p.
- (160) 日本医学図書館協会. “電子ジャーナル・コンソーシアム”. <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jmla/ejbuntan/ej/index.html>, (参照 2008-02-17).
- (161) 母良田功. 日本薬学図書館協議会電子ジャーナル・コンソーシアムの取り組み: 雑誌問題検討委員会報告. 薬学図書館. 2004, 49(2), 141-145p.
- (162) 日本医学図書館協会雑誌委員会. JMLA 電子ジャーナル・コンソーシアム・アンケート調査結果報告. 医学図書館. 2005, 52(3), 270-280p.
- (163) 宇陀則彦. “電子ジャーナル・コンソーシアムの現状”. 電子情報環境下における科学技術情報の蓄積・流通の在り方に関する調査研究 (平成 15 年度調査研究). 京都. 国立国会図書館関西館 事業部図書館協力課. 2004, 45-58p. (図書館調査研究リポート, No.2). http://www.dap.ndl.go.jp/ca/images2/report/no2/lis_rr_02.pdf, (参照 2008-02-17).
- (164) 細野公男. 特集, 図書館コンソーシアムの動向 pt.2, 図書館コンソーシアムの現状とその課題. 情報の科学と技術. 2005, 55(3), 108-113p. <http://ci.nii.ac.jp/naid/10016618040/>, (参照 2008-02-17).
- (165) 川上摩紀ほか. 特集, 病院図書研究会 2004 年度第 1 回研修会: グループ研究発表: 病院図書室におけるオンラインジャーナル: アンケート調査を実施して. ほすびたるらいぶらりあん. 2004, 29(3), 161-166p.
- (166) 石川晶子ほか. 特集, 病院図書研究会 2005 年度第 1 回研修会: グループ研究発表: 病院図書室での理想的なオンラインジャーナルの導入を考える: 仮想図書室を構築して. ほすびたるらいぶらりあん. 2005, 30(3-4), 233-237p.

- (167) 日本医学図書館協会. “国立ライフサイエンス情報センター (仮称) 推進準備委員会”. <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jmla/nlsic/index.html>, (参照 2008-02-17).
- (168) 阿部信一ほか. NPO 法人日本医学図書館協会「国立ライフサイエンス情報センター (仮称) 推進準備委員会」経過報告. 医学図書館, 2006, 53(2), 166-178p.
- (169) 磯野威. 小特集, 国立医学図書館: 日本医学図書館協会「国立医学図書館 (仮称) 検討委員会」の目的と概要. ほすびたるらいぶらりあん, 2003, 28(3-4), 245-247p.
- (170) 磯野威ほか. 特集, 図書館における医療・健康情報の提供: 国立ライフサイエンス情報センター (仮称) の可能性: 公共図書館と医学図書館のネットワーク. 現代の図書館, 2005, 43(4), 208-215p.
- (171) 阿部信一ほか. 国立ライフサイエンス情報センター (仮称) 推進準備委員会 (JMLA) の活動経過, 現状, 今後の方向性. 全国患者図書サービス連絡会会報, 2006, 13(4), 67-71p.
- (172) 阿部信一. 英国の図書館における健康情報サービス: National electronic Library for Health (NeLH). カレントアウェアネス, 2004, (281), 15-18p. <http://www.dap.ndl.go.jp/ca/modules/ca/item.php?itemid=967>, (参照 2008-02-17).
- (173) 酒井由紀子. “医学図書館の動向”. 図書館情報専門職のあり方とその養成. 勉誠出版, 2006, p. 129-148p.
- (174) Detlefsen, Ellen Gay ほか. インフォメーションニストあるいは ISIC (Information Specialist in Context): 新しい医学図書館員のひとつのモデル. 医学図書館, 2007, 54(1), 14-19.
- (175) 小野澤繁雄. MLA Code of Ethics for Health Sciences Librarianship の紹介. 医学図書館, 2004, 51(2), 116-124p.
- (176) Medical Library Association. “MLA Code of Ethics for Health Sciences Librarianship”. <http://mlanet.org/about/ethics.html>, (accessed 2008-02-17).
- (177) 山口直比古. 連載講座, Current Practice in Health Sciences Librarianship: 第 1 回: Handbook of Medical Library Practice: 専門職への道: Handbook の切り開いた世界. 医学図書館, 2007, 54(1), 20-26p.
- (178) 連載講座: Current Practice in Health Sciences Librarianship: 第 3 回特別企画: Handbook の時代. 医学図書館, 2007, 54(4), 328-333p.
- (179) 呑海沙織. 大学図書館におけるサブジェクト・ライブラリアンの可能性. 情報の科学と技術, 2004, 54(4), 190-197p. <http://ci.nii.ac.jp/naid/110002826911/>, (参照 2008-02-17).
- (180) 進藤達郎. 特集, サブジェクトライブラリアンは必要か: 図書館員のスキルアップとサブジェクト・ライブラリアン: 大学図書館員にとっての専門性. 情報の科学と技術, 2005, 55(9), 394-397p. <http://ci.nii.ac.jp/naid/110002829884/>, (参照 2008-01-09).
- (181) 諏訪部直子. 特集, サブジェクトライブラリアンは必要か: 医学情報専門家としての医学図書館員の新しい役割. 情報の科学と技術, 2005, 55(9), 369-374p. <http://ci.nii.ac.jp/naid/110002829880/>, (参照 2008-02-17).
- (182) 谷澤滋生. 特集, 創立 50 周年記念日本薬学図書館協議会研究集会 (平成 17 年度): 新しい時代の医薬情報スペシャリスト (2): 情報専門職と情報発信: 東邦大学での事例 Web, Mail, e-Learning. 薬学図書館, 2006, 51(1), 31-37p.
- (183) 青柳英治. 特集, ヘルスサイエンスライブラリーの構築: 病院図書館に求められるコンピテンシー. 日赤図書館雑誌, 2004, 12(1), 7-13p.
- (184) 中村友紀. 小特集: 総会・事例報告会 (第 110 回研修会), 病院図書室の業務分析 (第 1 報): 図書室担当者の専門性は生かされているか. 病院図書館, 2006, 26(2), 49-53p.
- (185) 松下茂. 特集, 創立 50 周年記念日本薬学図書館協議会研究集会 (平成 17 年度), 新しい時代の医薬情報スペシャリスト 3: 情報専門職員の現状と課題: 企業の実例. 薬学図書館, 2006, 51(1), 38-40p.
- (186) 長谷川昭子. 専門図書館における業務委託の現状. Library and Information Science, 2007, 57, 1-31p.
- (187) 特定非営利活動法人日本医学図書館協会. 研究会・研修会. <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jmla/event/index.html>, (参照 2008-02-17).
- (188) 野坂美恵子. 特集, 図書館員の研修制度: NPO 法人日本医学図書館協会の教育事業の紹介. 大学の図書館, 2006, 25(9), 152-154p.
- (189) 鈴木正紀. 研究文献レビュー, 大学図書館員の継続教育. カレントアウェアネス, 2006, 288, 22-26p. <http://www.dap.ndl.go.jp/ca/modules/ca/item.php?itemid=1032>, (参照 2008-02-17).
- (190) 特集, 研修会・勉強会案内. 医学図書館, 2005, 52(4), 320-363p.
- (191) 山崎茂明. Learning from each other!: 医学情報サービス研究大会を振り返って. 医学図書館, 2003, 50(4), 348-352.
- (192) 山田いづみ. 特集, 価値観の交差点: 医学情報サービス研究大会からはじまる交流の輪. 情報の科学と技術, 2006, 56(9), 401-405p. <http://ci.nii.ac.jp/naid/110004815077/>, (参照 2008-02-17).
- (193) 城山泰彦. 医学情報サービス研究大会をつくってきた人々: 大会参加者と演題発表者の分析を通して. 医学図書館, 2003, 50(4), 361-367.
- (194) 特定非営利活動法人日本医学図書館協会. 認定資格制度. <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jmla/nintei/index.html>, (参照 2008-02-17).
- (195) 特定非営利活動法人日本医学図書館協会教育・研究委員会. 「ヘルスサイエンス情報専門員」認定資格制度創設の軌跡. 医学図書館, 2004, 51(3), 210-219.
- (196) 特定非営利活動法人日本医学図書館協会認定資格運営委員会. 特集, 専門性の確立と評価に向けた職員養成の現在: 「ヘルスサイエンス情報専門員」認定資格制度の概要. 図書館雑誌, 2006, 100(2), 96-97p.
- (197) 吉江吉夫. 日本医学図書館協会認定資格制度への取組み. 日本病院会雑誌, 2003, 50(9), 1184-1390p. http://www.hospital.or.jp/mag/mag_index.html, (参照 2008-02-17).
- (198) 溝上智恵子. アメリカの図書館情報学教育と認証評価. 図書館情報メディア研究, 2004, 2(2), 33-44p.
- (199) 酒井由紀子. MLA の専門職能力開発プログラムと認定制度. 医学図書館, 2003, 50(2), 115-125p.
- (200) 首藤佳子. 病院図書館員認定資格のための必要条件. 病院図書館, 2003, 23(1), 17-22.
- (201) 長谷川昭子. 医学・医療系図書館員の認定資格制度. 日本図書館情報学会誌, 2007, 53(3), 147-171p.